

2. エミリーとジョンとジェームズと吾輩

あるダービー伝説

- エミリー・ジェーンは子守娘で
ジェームズは勇敢な近衛兵
ジョンは安月給の巡査だった
(そして吾輩はへぼ詩人)
- エミリー・ジェーンは気立てのいい娘 5
ジェームズは誠実で実直な男
ジョンも概ね善人だった
(まあ吾輩だって善人さ)
- 男ふたりはエミリーをめぐって恋敵 10
エミリーはどっちも好きで
どっちが本命かなんて決められない
(吾輩にだってそんなの無理)
- だが遅かれ早かれはっきりする 15
心の内は隠せぬもの
エミリーはそろそろ決めるべきだと思った
(吾輩もそろそろだと思う)
- エミリーは得意気に笑い 頬を赤らめ こう言った 20
「明日 誰か私をエプソム競馬に連れてって
そしたら その人と結婚するわ」
(吾輩だってそれなら喜んでできたのに)
- ジョンは苦悶の声を漏らしたが
ジェームズは一言 「決まりだね
喜んで連れて行くよ 愛しのエミリー・ジェーン」
(吾輩もそんなことなら言えたのに)
- ジョンは地面につっ伏して 狂ったように吠えだした 25
(だってジョンは大混乱)
それで小さい少年を思い切り蹴飛ばした
(吾輩だって腹が立てば よくやることさ)

なにせジョンは明日が当番
一日エプソムの取り締まり 30
若い奴らがきつとコース整備の最中に横断するから
(吾輩もやってる たまにだがね)

.

ダービーの日の太陽が ごろつきや
鮮やかな黄色の髪ガンボージの娘たち
いかさま師にスリ 詐欺師に追い剥ぎたちをギラギラと照らした 35
(吾輩も豎琴を抱えてそこで見てた)

その日ジェイムズは愛しのエミリーを連れてきた
ジョンは襟や首根っこをつかんで
横切るやつらを片っ端から捕まえた 40
(吾輩まで危うく捕まりかけた)

ジョンは愛しのエミリー・ジェーンとジェイムズを見つけ
その立派な若者然とした姿ねたを妬んだ
みんなが言ってた ジョンが「こん畜生」ってつぶやいたって
(吾輩もよく「畜生」って言うんだ)

ジョンは一日中 ふたりをコソコソつけ回し 45
上司にヒソヒソと耳打ちした
「ジェイムズとエミリーは札付きの盗人ですよ」
(吾輩も一理あるとは思ったよ)

けれどジェイムズはフォーク一本盗もうなんて夢にも思わない
エミリーだって 瓶やコルク一つ盗もうなら 50
赤面ものだと思うだろう
(吾輩は瓶をちょろまかすくらい良いと思うがね)

けれど ああ もっと深刻な犯罪が起きたんだ
ふたりは極めて大事な瞬間に
ふざけてコース内に侵入したんだ 55
(吾輩がジョンに告げ口してもうた)

ジョン巡査は即座にふたりのところへ飛んでいき
悪魔のような笑みを浮かべて
エミリーを渡らせ ジェイムズを引き返らせた

(吾輩はずっとハーブを弾いてた)

60

容赦ないジョンはふたりの苦悶を嘲笑い^{あざわら}
顔には勝ち誇った笑みを浮かべた
ふたりは嘆き コースを挟んで泣き叫ぶ
(吾輩だってこっそり涙を流す)

そしてエミリーは狂ったように泣きじゃくり
一方ジェイムズは激しく悪態をつく
それでジョンはいつになく上機嫌
(そして吾輩はへぼ詩人)

65

それでもジェイムズは再びコースを渡ろうとした
我らがイストミア競技さながらの騒動のなかを
ジョンはジェイムズをひっ捕え^{とら} 首根っこを掴んで痛めつけた
(ほんとジェイムズが気の毒で)

70

勝利者ジョンは自らの手でジェイムズを引っ立て
ジェイムズはほどなく
立派な特別観覧席の下の詰所にぶちこまれた
(吾輩だって何度も入ったとこ)

75

そしてジェイムズは 可哀想に終身刑
エミリーがいくら懇願しても無駄だった
それでジョンはエミリー・ジェーンを妻にした
(そして吾輩は今でもへぼ詩人)

80

(三木菜緒美訳)